

軍艦島 早すぎた未来都市



軍艦島全景



30号棟はニッポンのマンションの原点

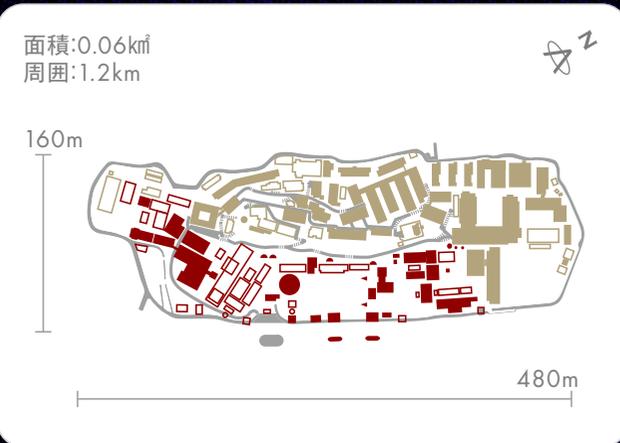
長崎県の西岸沿いの海底には、国内最良の石炭が眠る西彼炭田があり、20世紀には、沿岸の島々のほとんどが石炭の採掘拠点として栄えていました。軍艦島はその最南端に位置し、明治維新から高度経済成長の終わりまで、主に三菱鉱業が経営した、石炭黄金期を爆走した炭鉱です。

軍艦島の最大の魅力は、林立する炭鉱住宅群にあります。国内初の鉄筋集合住宅30号棟（1916年）をはじめ、建設当時国内最高層の日給社宅（1918年）、離島建築で初めて地下が施工された66号棟（1940年）、そ

して島内最大の建物65号棟（1945年）など、前例がなく、かつ日本の鉄筋集合住宅史上に燦然と輝く逸品ぞろい。これらの建物はいずれも大戦間時代、すなわち第一次世界大戦と第二次世界大戦の頃に建設されました。鉄砲や戦車など、製鉄に必要な石炭を増産する労働力確保のために建てられたもの。軍艦島とは、戦争とともに発展した炭鉱だったので

す。戦後復興から高度経済成長の時代には島民数がピークを迎え、狭い島に5,000人以上の人が暮らし

た。この時の人口密度は今でも世界最大。行商が並ぶ商店街は、毎日が年末の繁華街のような賑わいだったといいます。国内初の海底水道や国内初のドルフィン棧橋など、最先端のインフラが整備され、家電三種の神器の普及率が最速を誇ったのもこの時期でした。最先端の建物とインフラ、そして全てのライフラインを外部供給にたよった軍艦島は、まさに早すぎる未来都市だったといえるでしょう。



時化ると波しぶきが降りそそいだ潮降街



海上に中ノ島(右)と高島が見える最頂部からの眺望



1年中動き続けて炭鉱マンの命を守った換気施設



島内の建物を隅々まで繋ぐ渡り廊下



① 軍艦島に到着して最初に見えてくる65号棟 (⇒P70掲載)



② 1918(大正7)年に建てられて今も健在の日給社宅 (⇒P72掲載)



③ かつて遊廓があったエリアに建つ31号棟 (⇒P78掲載)

軍艦島周遊

軍艦島に到着したら、島の周りをゆっくりと周遊。船内で話したエピソードを、建物群を中心に、実際に見ながら航行します。戦中に建設された島内最大の建物65号棟からはじまって、100年前に国内最高層だった巨大珍建築や岩礁の頂上に建つ高級職員アパートなど、類を見ない特殊な鉄筋の集合住宅が密集する様子は圧巻の一言。分厚いコンクリートで覆われた護岸とともに、圧倒的な存在感で迫ってきます。

外海側の住宅棟群を一通り見たあと、船は沖合へでて一旦停泊。軍艦島がもっとも軍艦島らしく見える場所から、じっくりと鑑賞タイムです。かつては竪坑の櫓が聳え、煙突から煙を吐いていたので、現在よりもはるかに軍艦島のように見えたはず。しかし櫓や煙突がな



④ ニッポンのマンションの原点といえる30号棟 (⇒P76掲載)

い今も、軍艦に見えることにはわかりありません。日本で、いや世界で唯一の光景です。

後半は内海側へ回り込んで、おもに炭鉱施設があったエリアを見学。国内初の海底水道の取入口や明治時代の煉瓦の壁、そして岩礁を包み込むように造られた石積みの擁壁など、住宅棟側とはまた全然違った軍艦島の姿が見られます。

なお、ワンデイツアーでは、軍艦島には上陸しません。これは冒頭でもお話しした、観光上陸でも住宅棟群は船上からしか見学できないことに加えて、現在観光上陸を催行する5社だけで上陸可能な時間が埋まってしまう、あらたな上陸船の枠をつくることができないという事情もあります。



⑤ もっとも軍艦らしくみえる沖合からの光景



⑥ 数少ない明治時代の遺産。第三竪坑捲座の赤い煉瓦壁 (P88掲載)と島民の命を守った国内初の海底水道の取入口 (⇒P84掲載)



⑦ 特殊な自然環境と闘い続けた記憶が眠る、国内初のドルフィン棧橋 (⇒P86掲載)



⑧ 中央に聳える岩礁を覆った石積みの擁壁は軍艦島最大の世界遺産 (⇒P82掲載)